

高山の文化を築いた人々 19

短歌文学ひとすじに 鎌手白映

川上喜美



歌集は素描「黄昏の丘」「夕映」「白映遺歌集」がある。

そのうちの第三歌集の題名は、生前福田夕映さまとの約束で、お互いの雅号を一字ずつ持ち寄つて「夕映」としたらよからうと決めてあつたと聞いている。明治生まれの一徹は、中央歌壇におもねる事なく、あくまでも確とふるさとの地に足を構え、作家に対峙した人であつた。その証拠は左の歌の

「ひととはひと われはわれなりとにかくに わがゆくみちを われはゆくなり 白映」の一首に、はつきりと表れている。口数の少ない人で、よくあれで商売をして来られたと、娘の私でさえ思つた事であつたが、大家族を支えるのに、進学もあきらめ家業に従事するより外はなかつたようである。

たまに瀧井孝作さまが高山へおいでになると、父を尋ねて下さり、小半日実家の座敷で父と一献されるのが常であつた。孝作さまと共に在る時、父は饒舌で呵呵と笑い合う一面もあつた。



絵は刷毛を用いた大胆な勢いのある画から、細筆を使った緻密な絵まで画いたが、後年高齢者展等へは主に細筆書の掛軸画を出していた。夕映さまの絵に父

が讃を書いたり、父の絵に夕映さまが讃を入れてくださった軸が沢山ある筈である。私が貰つた軸は家の土蔵を毀した折、保管に自信がなかったため、他の物と一緒に郷土館に納めた。

篆書は大家書も小篆も書き、娘の私が言うのはおかしいが、特に篆刻は秀でていたと思う。私も真似事をしようと思つた事があつた。その折、定まつた道具で彫つては味が出ない」と、白映遺歌集を編む折に、表紙の見出しと見送りに篆刻印作品の一部を沢山使わせて貰つた。

短歌評は、私がものを申すのはおこがましいので、孝作さまのお言葉をお借りする事にする。『この頃の飛騨短歌では、鎌手白映の歌のうまいのが目につきます。それは美しい気分の濃い出来栄えで、事物をちつと見詰めた詠みぶり、うまい言葉を丹念に選んで、錬磨して、いつも歌の言葉が口中で千転して、凡そ日常の行住坐臥に歌ごころのある円熟の歌人の感じ。中略：この人の係譜は昔の新古今の流麗も汲んで、また先輩では北原白秋、福田夕映などの耽美の流れもあるのでしょうか、この人の円熟は、今日の歌壇では、どこへ出しても恥ずかしい一家を成した歌人ではないかと考えられます。』

鎌手白映讃 瀧井孝作

歌碑は上野平殿の辻に建つ。碑面は、

のりくらは天のたか山夕焼て
ただれて燃えて空に消えたり

白映

昭和五十三年二月二日、八十四歳の生涯を全うした数日前の絶筆である。

(筆者は白映の娘)